

# 東京バッハ合唱団 月報

[第521号] 2005年11月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732  
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.521  
November 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 、 バッハのクリスマスと祝祭の音楽

第98回定期演奏会

2005年12月17日(土)午後4時開演、石橋メモリアルホール

今回の定期演奏会は、顕現節のためのカンタータ BWV123《いとしインヌエル わが魂の救い主よ》、宗教改革記念日などの用途が考えられる BWV192《ああ感謝せん神に》、かなり大きな結婚式のためと思われる BWV197《主かたき望み》、以上の3つのカンタータと、《クリスマス・オラトリオ》の中から終曲のコーラル合唱 **あだは今しも 退けらる** (第64曲)を加えて、バッハの喜びの音楽を集めたプログラムとしました。

BWV192も、BWV197も、神への信頼と感謝をうたう讃美の音楽で、クリスマスシーズンにも、またどのような機会にも演奏できるような、明るく楽しいカンタータです。

当合唱団では、この数年、これまでに演奏し残したカンタータ作品に、「50曲選」として出版された作品などを織り込みつつ、BWV番号の若い順に、定期演奏会の曲目に選んできて、いよいよ今回と来年5月(第99回)とで最後の190番代に入り、このシリーズを終了することになります。

クリスマスシーズンの最後の祭日である顕現節は、東方の3博士が星に導かれて、ベツレヘムで生れたばかりのキ

リストを訪れたことを記念します。その福音書記事の直前には「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインヌエルと呼ばれるであろう」とあり、その意味は「神われらと共にいます」であると解かれています。この祭日の主題を、木管楽器で柔らかく神秘的に表わせば BWV123 となり、トランペットとティンパニで爆発的な喜びとすれば《クリスマス・オラトリオ》第6部の終結コーラル(第64曲)となります。

このコンサートでは、神讃美の2つのカンタータともども、バッハの音楽作品中でも最上質の喜びの表現を味わっていただけるはず。「50曲選」の出版も完結し、これを記念する意味もこめて、みなさまも一緒にお喜びいただければ幸いです。ご来場を心よりお待ち申し上げます。

入場料：全席自由席 3000円(当日売り 3500円)  
チケット取扱い/予約：東京バッハ合唱団事務局  
連絡先は当月報のタイトル囲み内をご覧ください。  
(郵便振替：00190-3-47604 東京バッハ合唱団)

## 真夏のウズベキスタン

「看護教育改善プロジェクト」に参加した3週間の経験

出口 禎子(団員:ソプラノ)

「ウズ・・・何とかという国から電話がかかってきました。雑音がひどくて聞き取れませんでした」という伝言をうけとった時、JICA(国際協力機構)の行う「ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト」への活動開始でした。心配する友人達から「ウズベキスタンってどこにあるの?」「通貨はなに?」「言語はなに?」「飛行機でどれくらいかかるの?」...でも、何を聞かれても何も答えられませんでした。

ウズベキスタンは、1991年8月31日に、ソビエト連邦共和国から独立しました。9月1日が独立記念日となっています。首都はタシケント、国土は日本の約1.2倍、人口は2490万人で、ウズベキスタン人が60%、他にロシア人、タジク人、タタール人、カザフ人などが住んでいます。またそれに伴って、言語もウズベク語、ロシア語、タジク語



などがあり、ロシア人はウズベク語が理解できず、ウズベク人はロシア語がわからない...という不自由な状況になっています。でも英語はほとんど通じません。宗教はイスラム教の他、ロシア正教などです。純粋で勤勉な国民性は一昔前の日本に共通するところがあるように思いました。通貨は「スム」。初めて聞いたときは「ウ〜ム?」と思いました。1円が10スムなのですが、1000スム札がほとんどなく、両替をすると、なんと100スム札など500スム以下の

お札がどさっと輪ゴムでとめられてきます。次からは紙袋をもって両替に行くようになりました。

私がウズベキスタンに行った8月の中頃の気温は40度前後でしたが、湿気がないのでそれほど苦痛という印象はありませんでしたが、それでも車の中に置き忘れたペットボトルの水は完全にお湯になっていました。食べ物は想像していたよりおいしく、特にトマトやスイカは、日本よりおいしいと思いましたが、その理由は「一年365日のうち、360日は太陽が出ているという国なので、雨が少なく日の光がよくあたるから」ということでした。でも夏が終わると、野菜が全くなくなるので、主婦達は夏の間野菜や果



現地スタッフとの打ち合わせ。中央右側が筆者

物をジャムやピクルスにして冬の野菜対策に備えているようです。主食のナン(直径20センチくらいのパン。これはおいしいが、私にとっては3食分くらいある)は、50円くらい、スイカは30円くらい。ところが、私は1週間目くらいからお腹をこわし始め、下痢と嘔吐を繰り返してとうとうダウンし、救急医療にかかってしまいました。なんと救急車が来てくれて、点滴をしてくれて(しかもその間、2人の医師がずっと付き添ってくれて)薬を飲んで、また救急車で帰っていくのです。日本の救急医療事情からはとても考えられません。痛い思いをしました。これはとてもいい経験になり、救急車を呼ぶほどではないけれど、外来で待つのは辛いという状況を強られる、日本の外来医療のあり様を考えさせられました。

この日から、私は医師から「食べたことのないものを食べないように」「おかゆと堅い揚げパン(まるでクルトンのようなもの)だけをたべるように」という処方いただき、ホテルに頼んで特別食を作ってもらいました。しかし、「おかゆ」が通じません。全がゆの団子の様なものが出てきたり反対に重湯が出てきたり、普通のおかゆにありつきたのは3日目頃でした。JICAの人たちは同情してくれましたが「外国で体調を崩すということはこういう事なんだ」と痛感しました。この間、何かと私の面倒を見てくれたタジキスタン人のディルショーダさんというお嬢さんは、5カ国語が話せます。タジク語、ロシア語、ウズベク語、英語、そして日本語です。とてもしっかりしていて謙虚で配慮のできる女性で20歳とは思えません。私たちと何が違うのだ

ろうと、私は帰国してからも考えていました。彼らは僅かに与えられる教育の機会や資源を最大限に生かして生きていますが、私などは与えられすぎて、持て余しながら生きているのではないかと...そんな気がします。

ところで、私も初めて知ったのですが、日本のウズベキスタンに対する援助実績は、2004年までで、有償資金協力975.52億円、無償資金協力167.86億円の他、技術協力、人道支援協力などで、アメリカ、ドイツと共に、主要援助国のひとつとなっています。そして私はこの暑い最中に何をしにウズベキスタンに行ったのかというと、この国に新しく「精神看護学」のカリキュラムを作るためでした。この国には精神看護学という学問がありません。まずはこの国の医療事情を知らなければお話にならないと3施設の見学をし、JICAと保健省が計画した「精神看護学とはなにか」というセミナーを行いました。精神病院はちょうど数十年前の日本の状態と似通っており、大きな病室にベッドだけが20個くらい置かれています。トイレにはドアもなくシャワー室のカーテンもありません。また病棟には薬品や器具がほとんどなく、医師や看護師もどこにいるのだろう...というくらい見あたりませんでした。本当にこれは大変だ!と思いました。翌日から、現地の方々と共にカリキュラムについて話し合うワーキンググループが始まりましたが、現地の文化や生活習慣を尊重しつつも、専門家が入っているのにほとんど修正ができなかったということにならないようにと駆け引きのような話し合いが続きました。

この仕事の合間を縫って、ぜひ行きたかったナヴォイ劇場と、この地で亡くなった日本人捕虜の方々のお墓に連れて行っていただきました。ナヴォイ劇場の建物の壁には、「この建物の建設には多くの日本人が加わりました」という文章が手書きで書かれてあり、その文字を目にした時は思わず胸が詰まり涙が出そうになりました。1940年代にこの遠い地に連れてこられた日本人たちが、生死の境で生き延びながらこんなに立派な建物を建てたのだと思うと、遠い時代の日本人の誇りさえ感じました。このナヴォイ劇場では、今も現役で毎日コンサートなどが開かれています。

また日本人墓地は以前は荒れていたそうですが、ウズベキスタンの前大使であった中山恭子氏が赴任された折りにきれいに整備されたということでした。そのお墓が今も現地の人たちによって守られ、こんなにきれいにされている...とほっとすると同時に、現地の方々への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

仕事の合間を縫ってサマルカンドにも連れて行っていただきました。あまり乗り心地が良くない車で4-5時間、でも時間は平気で遅れます。この時も突然車が止まって、そのまま40分くらい停車しました。どこからか「火が出た」という声が聞こえて、密かに避難しなくていいのかなあと思いましたが、あわてる人はおらず火が消えたら、また何事もなかったかのように走り出しました。当然ながらこの間何のアナウンスもありませんでした。でもサマルカンドにある世界遺産、レギスタン広場の建物は、青、緑、白のモザイクで作られており、本当にすばらしいものでした。

これらの色は国旗と同じでそれぞれ空、自然、天国を表しているそうです。こんな機会でもなければ、きっと一生見ることのなかった世界遺産でした。文化も生活習慣もまるで違う国で、精神看護学のカリキュラム作成のお手伝いをするということは、責任が重く気の長い話です。11月には現地のメンバーが日本の精神病院を見学に来ます。帰国してから現地のカリキュラム作成に生かせる貴重な経験にしてほしいと、現在さまざまな調整をしています。苦労してやっとカリキュラムを作っても、現地の人たちがそれらを自分たちのものとし、定着させるためにはさらに時間がかかると思います。これからはしばらくの間、私はそのお手伝いをしたいと思っています。

(筆者：北里大学看護学部教授)



サマルカンド、レギスタン広場

## 《マタイ受難曲》の合唱 練習の手引き シュヴァイツァー『バッハ』から

初めてゼミ形式で練習後にスタートさせたのが、1964年7月、東川清一氏を初代講師とする「シュヴァイツァー・ゼミ」でした。シュヴァイツァーの演奏拠点ストラズブルで留学してきた主宰者にとって、この著書は、故郷の香りにみち、40数年たって、《マタイ》再演をひかえた今の時期、あらためて彼のことに触れるのは、大きな励ましとなります。新旧団員も、この著書の存在を思い出していただければと願って。

(大村)

引用は、白水社『シュヴァイツァー著作集』第14巻「バッハ」下(浅井真男・内垣啓一・杉山好共著、1958年)より。

楽番号は、新バッハ全集版によるものに、訳詞は大村訳に、それぞれ差し替えた。引用者による補筆は[ ]で示した。…は、引用者による省略箇所を示す。曲名『』は《》に、楽曲歌詞「」は に、それぞれ改めた。

《マタイ受難曲》の歌詞はきわめて入念に仕上げられている。…われわれは、バッハがこの歌詞の計画をこまかい点まで立案し、全く自分の監督のもとでピカンダーに書かせたという印象を受ける。(p.19)

劇的構想は繊細であると同時に素朴である。受難物語が分割されて絵のつらなりとなる。性格的な箇所が物語が中断し、いま演ぜられたばかりの場面が、敬虔な省察の対象となる。この省察は、通例アリオーソ風のレチタティーヴォに続くアリアのなかで語られる。さらに小さな静止点では、静観する信徒たちの感情がコラルの詩句によって表現される。この選択はバッハの仕事となった。なぜなら、多少とも自負を持つ当時の詩人は誰も、そんな下級の仕事にたずさわるはずがなかったからである。しかし、ほかならぬこのコラル詩節の挿入という点に、バッハの詩的感覚の真の深さが示されているのである。ドイツの教会用歌の財宝全体のなかから1曲でも、バッハが選択したものを以上に、当該の箇所にとつたりと当てはまるようなものを発見することは不可能である。(p.19)

### 3つの大合唱

#### 1. 合唱 来たり嘆け 娘らよともに (合唱・、児童合唱)

[ピカンダーの]歌詞が完成してからも、バッハはさらに変更を加えた。…彼はイエスが市中を引廻されて十字架へ連れて行かれる有様を見たのである。彼の眼は群衆が街中を走り廻るのを見、彼の耳は彼らが叫び交わし、答えあうのを聞いた。この幻想から彼は、《受難曲》の導入部を力強い二重合唱曲として創り上げたのである [ピカンダーの歌詞では、合唱をともなうアリアとして構想されていた] (p.20)

…この楽曲は写実的に構想され、波打ち押合いわめき叫ぶ有様を表現しているのである。

…管弦楽序奏も、重くのしかかるようなアクセントと或る内的不安とをもって演奏し、同一の音符を固執する低音部と和声の連続のなかの怖るべき非情さが憂慮の印象をひきおこすようにすべきであろう。いずれにしても、…この楽曲のテンポは普通にはあまりにも引きずるようになっている。(p.21)

#### 29. コラル 人よ なが罪に泣け (合唱・、児童合唱)

第1部の終結をなすコラル合唱 人よ なが罪に泣けについても [Nr.1と]同様のことが経験される。管弦楽伴奏は、気高い痛みモチーフに基づいている。器楽パートだけを見ると、この楽曲を或る厳かなテンポで演奏したい誘惑を感じる。それに反して合唱声部をもとにして考えると、テンポをいちじるしく速めることになる。というのは、よく吟味してみると、コラルの各行の装飾法(フィグレーション)が極度に情緒的であって、もしそれが生命をもって出て来ないと、効果は全く失われてしまうということが判明するのである。(p.22)

#### 68. 合唱 嘆きつつ み墓のもと (合唱・)

第2部の終結の合唱(第68曲)は、《ヨハネ受難曲》のそれと同様に、葬りの音楽として構想されている。ここでも独得に下降するモチーフが楽曲にその性格を与えている。まるで見る者のまなざしが、屍が墓穴の底に沈むのを追うかのようなのである。(p.23)

## 民衆の合唱

民衆の合唱は、マタイ伝とヨハネ伝の受難物語の叙述の大きな相違を、バッハの音楽のなかでもはっきりと示す。

《ヨハネ受難曲》のなかで民衆の合唱は劇的な興奮に支配されているが、《マタイ受難曲》のなかでは民衆の合唱に或る叙事詩的落ち着きが附随している。…《ヨハネ受難曲》において民衆の合唱は事件進行の担い手であるが、《マタイ受難曲》においては受難記事の一部でしかないような姿を取っている。(p.23)

十字架のもとでの合唱、宮をこぼち 三日のうちに (58b) と 人を救いて おのれ救えぬもの (58d) の合唱になると、《ヨハネ受難曲》の合唱に活気を与えていたデモーニッシュなものが有力になる。この合唱のなかでは、降りよ 十字架より (58b 後半) の語句が非常に効果的に模写されている。(p.23)

…残念なことに、これらの民衆の合唱の演奏の際には、管弦楽の美しい細部の多くが失われてしまうのが通例となっている。現代では、器楽声部の人員が合唱声部に比してあまりにも少数だからである。げに なれも仲間なり (38b) の個所のフルート・パートにある傲慢な笑いを聞き取る聴者があるだろうか。十字架にかけよ (45b, 50b) 当てよ 当ててみよ (36d) われら 知らず (41b) その血は われらと われらの子らに (50d) の個所のフルートを気にとめる者があるだろうか？ 安かれ なんじユダヤの君 (53b) でフルートが表現するお辞儀を目に浮かべる者があるだろうか？ ほかの器楽が多かれ少なかれ歌唱声部とともに動いているのに、バッハはこれらの合唱曲の一まとめになったフルートに全く独立的なパートを割当てている。(p.24)

現代の上演において合唱隊を編成する際に、状況がいかに無視されるか、驚くべきものである。十二弟子の言う いずこに 主よ われら過ぎ越しの備えせん (9b) と 主 そはわれなりや (9e) の言葉、また、1、2の僕(しもべ)と婢女(はしため)の言う げに なれも仲間なり (38b) や、十字架を守る百卒長と兵士どもの げに こは神の子なりき (63b) の言葉を 400 人の合唱で聞かされることさえあるのだ！ バッハはどの合唱隊をも各声部 3 名、せいぜいのところ 4 名で編成したのである。(p.24-25)

[ いかに主の心ふるえ み顔は蒼ざめたり (19 . テノール・レチタティーヴォ) ] は、フルート [ リコーダー ] とオーボエの不安げなため息に伴奏されている。それに加えて、低音部は永く同じ音を固執する早い 16 分音符を奏する。これが驚きと震えを意味する。(p.31)

…この楽曲を中断して入るすばらしいコラール この煩いは いずこより (19 . 合唱 ) から、信徒たちの同情に含まれた不安と憂いを感じ取られなくてはならない。このコラールはピアノで、前へ乗り出すような動きをもって歌わせ、言葉が興奮した囁きとして洩れるようにするのがよい。次のアリア 目覚めおらん イエスのもと (20 . テノール) のなかの合唱 われらが罪も 眠り入らん は、

夢のなかでのように軽く歌われなくてはならない。ただ注意すべきは、テンポを緩くしないことである。(p.32)

二重唱つき合唱 わがイエスは 捕らわる (27a . ソプラノ/アルト, 合唱 ) を考察する際には、バッハの音楽が何よりもまず状況音楽だという事実から出発しなくてはならない。彼の音表現にとって決定的なものは、主は 引きゆかれ 繋がれたり (同 27a . 二重唱最終部分) の語句である。バッハは、縛(いま)しめたイエスを前へ突きやりながらゲツセマネの暗い樹々の下を進行する群衆を見る。さらに彼は、この群衆のあとから歎きの声と 待て 主を はなせ! (合唱 ) という呼声をあげながらついて行く信徒の群れを思い描いているのである。(p.34)

いかずちも 稲妻も 雲間に隠れしか (27b) の合唱の演奏が実にしばしば聴者に幻滅を感じさせるのは、たいていオルガニストの罪である。オルガニストは持続するフォルティッシモの和音によって一切を圧倒し、その結果もっとも強力な合唱隊をも、無力の印象を与えるようになってしまっている。その場合には、遠い雷鳴のようにとどろいてこの楽曲の基礎をなす 16 分音型が、まったく効果を失ってしまうのも当然である。オルガニストがその主要任務と見るべきは、これはバッハの総譜も指示しているのだが

16 分音符の経過句を浮き出させるのに助力することである。…低音部音型が明瞭に現れる瞬間に、この合唱曲の効果は保証されたことになるのである。(p.36-37)

第 2 部の冒頭 [ 30 . アルト・アリア + 合唱 いずこに な が友は ] は、まだゲツセマネを舞台にしている。騒ぎはしずまった。夜が更けた。寂しい園のなかで「シオンの娘」がおろおろと歩きまわって、主を探し求めている。ああ今や わがイエス 去りぬ と彼女が歎く。信徒の合唱が彼女につき従って彼女を慰めようとする。(p.37)

…テンポはせき立てるように不安に取るべきである。歌唱声部が休止しているところに、バッハはフォルテを指定している。導入部の数小節において聴者が驚愕に捉えられるようでなくてはならない。暗い森のなかで手をもみながら走りまわる女の姿を、眼前に見るようにさせなくてはならない。(p.39)

バッハが強弱法と楽句法の指定を記入した声部分譜の原譜も保存されている。そのなかには完全なオルガン声部分譜が 2 冊ある。つまり、2 つの合唱隊それぞれにオルガニストがついていたのである。しかし…初演のときには、同じオルガンが両合唱隊の伴奏をしたのである。(p.46) [ 初演後に、トーマス教会ではリュック・ポジティーフ ( 背後音管用手鍵盤 ) の独立したオルガンが設置された。 ]

現今の上演の際に、両合唱隊が左右あるいは前後にぴったりと並んでいるのは不利である。バッハの作曲が目ざしているような両者の交互作用は、そういう配置によってそこなわれてしまう。差し支えないかぎり、位置の分離は絶対に実行すべきであり、この分離が多少の距離を隔てた配置によって可能でさえあれば、協働上の困難をも恐れてはならない。成果は労力に報いて余りあるであろう。(p.46-47)

fine